

芸談◇新しくない大蔵卿

六代目 尾上菊五郎

〈出典：「演芸画報」昭和6年5月号〉

今度初めて大蔵卿を出すことになったのだが、大分^お之^れ迄^はとは思わくを替えて居るので、新しいとか写実だとか言われて居るようです。然^{しか}し私^{あつし}は新しい意味や写実でなく、何^ど処^こまでもお芝居^{やっ}で演^やて居るのだから、新しく見えても決して新しくない、古いのだから其^{その}積^つりで見て貰^{もら}いたいと思うんです。

今度の上演^うに就^つては橋^{はし}尾^おの叔父^{おじ}さんにも聞き、築^つ地^ち（団^{だん}十^{じゅう}郎^{りょう}）の叔父^{おじ}さんのも研究^{けん}し、之^{これ}に自^{みづか}分の工夫^{くわ}を混^まぜたもので、写^{しや}実^{じつ}なら奥^{おく}殿^{でん}は寝^ね巻^{まき}で出^いる訳^{わけ}になるが、私^{わたくし}は何^い時^じもの通^とり^りで演^やつて居^ゐる。だ^が例^{れい}の引^ひ抜^ひて干^ち早^{はや}になる、彼^{あいつ}奴^{やつ}は眞^{まこと}任^{にん}のよう^{よう}で公^{こう}家^けには向^{むか}ひないから引^ひ抜^ひかないこと^{こと}にしました。

先^{まず}檜^ひ垣^{がき}では馬^{うま}鹿^かの心^{こころ}で、家^{うち}に馬^{うま}鹿^かの公^{こう}卿^{けい}の靴^{くつ}を脱^ぬいだ歌^{うた}かなにかあつたことを思い出^{おも}して『二^ふ人^{にん}共^{ども}出^いか^し居^ゐつたなア』の^こところ^{ところ}から靴^{くつ}履^{はき}のを忘^{わす}れて、フラフラと行^いきか^けけるので、鳴^{なる}瀬^せが気^き付^つて止^とめ、教^{おし}えるが分^わらないので履^はかせるとい^いうよ^ような^なこと^{こと}を演^やつて居^ゐる。それ^{それ}から幕^{まく}切^きに鬼^{おに}次^じ郎^{らう}と顔^{かほ}を見^み合^あはせてチ^ちョ^ょンと^となり、檜^ひ扇^{せん}で顔^{かほ}を隠^{かく}す、彼^{あいつ}前^{まへ}は何^い時^じも供^いの者^{もの}を数^{かず}えて居^ゐるが、私^{わたくし}のはズーッ^{ずー}と見^みて行^いくと鬼^{おに}次^じ郎^{らう}と顔^{かほ}を合^あせる。鬼^{おに}次^じ郎^{らう}の方が思^{おも}わ^ず顔^{かほ}を隠^{かく}すが、此^{こゝ}処^{ところ}は苦^{くる}なしに見^みて居^ゐるとい^いうよ^ような^な気^き持^{もち}ち^ちでや^やつて居^ゐます。

曲^{きょく}舞^{まい}に就^つて調^{てう}べ^べて貰^{もら}ったら、観^{くわん}世^せ座^ざに久^く世^せ舞^{まい}、金^{きん}剛^{ごう}座^ざに口^{くち}勢^{せい}舞^{まい}、保^ほ昌^{しょう}座^ざに九^く節^{せつ}舞^{まい}、金^{きん}春^{しゅん}座^ざに曲^{きょく}舞^{まい}とい^いう、之^{これ}は足^{あし}利^り時^じ代^{だい}にも行^いわれ、此^{こゝ}舞^{まい}を大^お頭^{づつみ}とい^いう、大^お頭^{づつみ}は鼓^{つづみ}の拍^{つづみ}子^この名^なで、序^{ついで}に吃^{ども}又^{また}の大^お頭^{づつみ}の舞^{まい}の言^{こと}葉^はも明^あ白^{はく}にな^なるとい^いうもの^{もの}です。

曲^{きょく}とい^いうのは謠^{わう}曲^{きょく}一^{いっ}番^{ぱん}中^{ちゆう}の骨^{ほね}子^ことも云^いうべ^べき文^{ぶん}句^くの^こところ^{ところ}である、曲^{きょく}に居^ゐ曲^{きょく}、舞^{まい}曲^{きょく}の二^{ふた}種^{しゆう}が^あり、曲^{きょく}の文^{ぶん}句^くの時^{とき}に動^{うご}か^かず座^ざして居^ゐたり、葛^{かつら}桶^{おけ}にか^かけて居^ゐる時^{とき}を居^ゐ曲^{きょく}と^いい、曲^{きょく}の文^{ぶん}句^くに連^つれて舞^まう時^{とき}を舞^{まい}曲^{きょく}と^いう……

と狂^{くる}言^{ごん}に委^{くわ}しい方^{かた}から教^{おし}えて貰^{もら}いましたが、舞^{まい}の時^{とき}は余^{あま}り莫^ぼ迦^かにな^ならず踊^{おど}つて居^ゐる。勘^{かん}解^げ由^{ゆう}が斬^きか^かけても利^り口^{くち}にな^なつたり莫^ぼ迦^かにな^なつたりせ^せず、舞^{まい}う時^{とき}は澄^{すま}して舞^{まい}い、舞^{まい}い納^なめれば莫^ぼ迦^かで居^ゐる演^や方^{かた}なん^{なん}です。

此^こ曲^{きょく}舞^{まい}の場^ばで、何^い時^じも足^{あし}拍^{ぱく}子^しで這^{はい}入^いるのを這^{はい}入^いず^ずに、腰^{こし}元^{もと}を遠^{いれ}慮^しせよと入^いて了^{しま}い、それ^{それ}から蠅^はを^はい^い廣^{ひろ}盛^{せい}の耳^{みみ}へ吹^ふ込^こめとい^いうこと^{こと}に演^やて居^ゐるが、扱^{さて}大^お詰^{づめ}へ来^きると、莫^ぼ迦^かと利^り口^{くち}を使^{つか}い分^{ぶん}るのを今^{いま}度は『今^{いま}迄^{まで}包^{つつ}む我^{わが}本^{ほん}心^{しん}……』と云^いつてから利^り口^{くち}で幕^{まく}切^きまでや^やることに仕^{つか}て居^ゐます。それ^{それ}から之^{これ}迄^{まで}は清^{せい}盛^{せい}の首^{くび}を搔^か切^きる形^{かたち}をしたもの^{もの}だが、清^{せい}盛^{せい}は入^い道^{だう}だから、落^は語^ごの弥^や次^じ郎^{らう}じゃ^あないが裸^{はだ}体^{たい}の胸^{むね}ぐら^らや坊^{ぼく}主^{しゅ}の毛^けを掴^{つか}む形^{かたち}も無^む理^りだ^だし、抱^{だく}よう^{よう}な形^{かたち}も滑^か稽^きだからモロに此^こ処^{ところ}は抜^ひいて居^ゐる。勘^{かん}解^げ由^{ゆう}の首^{くび}は長^{なが}刀^{たう}で討^うち、三^{さん}重^{じゆう}で幕^{まく}にして居^ゐるが、一^{いっ}ツ^つ発^{はつ}見^{けん}したの^のは何^い時^じも市^{いち}登^と太^{たい}夫^ふがき^きり^りん^んき^きり^りん、き^きり^りんや、き^きり^りんが^がない^いた^たと^とと語^ごつて居^ゐるから、本^{ほん}文^{もん}の『あ^あか^か月^{げつ}』を見^みると、き^きり^り（^ん）の^う、き^きり^り（^ん）き^きり^り（^ん）限^{かぎ}りの^うて^ても力^{ちから}も^もないもの^{もの}を。

とあって限りがないというのであるから、そうやって貰って居ます。九日の日だが大笑いさ。御殿で『礼には及ばぬ、とつとと行かしませ』を何うした拍子か『立しませ』と云ったから堀川の与次郎さ、私も途中で気が付いて台詞を囓んだが追つかない、近來での大笑いさ。

其から檜垣の衣裳の柄は、橋尾の叔父さんが取っておきの直垂の柄を借りて拵らえさせたので、非常に好いと思つて居ります。